

第2分散会【ふるさとで学び、新しい時代を拓く、開かれた学校・学級経営の創造と推進を図る】

一人一人に生きる力を育む小規模校ならではの教育の創造

～地域の教育資源を活用した「西門川稲作愛情物語」の実践を通して～

宮崎県門川町立西門川小学校
(5学級, 23名)

1 地域及び学校の概要

門川町は、約17900人が居住する。県北の日向市と延岡市に挟まれた山と海のある自然豊かな町である。天然の良港門川湾では漁業が盛んで、宮崎ブランド「きんはむ金鱧」や豊富な種類の水産加工品が有名である。また、町のシンボル、カンムリウミスズメは、枇榔島周辺の海上に、世界の約半数にあたる約3千羽が生息している。町内には、本校を含め4つの小学校（他の小学校は中規模校）と、2つの中学校がある。本校の隣に西門川中学校があり、運動会や文化祭などいろいろな面で連携をしている。本校は、門川町の西側に位置し、そばを五十鈴川が流れてその周りには田が広がり、山からは鳥の声が四季を通じて聞こえる。



本校は、2年,3・4年複式,5・6年複式,特別支援学級2学級の合計5学級の平地校である。児童数は23名,職員数10名の学校である。小規模特認校制度の中で,町内(校区外)よりスクールバスで3分の2の児童が通ってくる。町の加配等により,主要な教科は複式指導を解消している。

研究主題

一人一人に生きる力を育む小規模校ならではの教育の創造
～地域の教育資源を活用した「西門川稲作愛情物語」の実践を通して～

2 研究主題設定の理由

西門川地区の児童は、年々減少傾向で、平成31年度をもって、閉校の予定である。特任校制度を利用して本校へ通う子どもたちは、小規模人数でのきめ細かな指導や、地域の方や自然と触れ合う体験活動などを求めてきている。本町の教育目標「ふるさと門川に誇りと愛着をもち、未来を切り拓くたくましい子どもの育成」や本校の教育目標「創造性に富み、情操豊かで、心身ともにたくましく生きる子どもの育成」にあげられているのは、郷土愛や「たくましさ」で表現される生きる力である。そのような中、昨年まで米作り（田植え、稲刈り、脱穀、餅つき）などを地域の方々の力を借りて行ってきた。この米作りの行事は、それぞれが単発で終わり、児童にとってはつながりがなく、指導する側にとっても養いたい力が明確ではなかった。昨年末、教育課程の評価の中で、米作りの行事が改善の項目として上がり、地域の方々（地区長、高齢者クラブ会長）に相談し、総合的な学習の時間の中で、生きる力を育成していくことを目標に指導していくこととした。

そこで本年度は、稲作をテーマに、地域の教育資源を活用して、養いたい力を明確した単元をつくり、特に国語科と関連させながら、児童に生きる力を育成したいと考え、研究主題を設定した。

3 研究の仮説

- 稲作をテーマに、地域の教育資源（ひと・もの・こと）を活用して、課題と出会い、解決していく学習を繰り返す中で、児童は、問題解決力、コミュニケーション能力、表現力を高め、さらに郷土愛を育んでいこう。

4 研究の内容

(1) 「西門川稲作愛情物語」の基本的な考え方

- ① この総合的な学習の時間の単元「西門川稲作愛情物語」は、西門川の地で、稲作に関係する様々な思いに触れることを通して、児童自らが成長していく学習であることを意味している。
- ② 児童に体験を通して、取り組むテーマの予備知識を身に付けることが大切である。
 - ・ 児童は、身近に米作りを見ているが、知らないことが多い。これでは、学習内容の最終段階「発信」はできない。まずは米作りとは何かを知るところから始まる。その知る活動は、本やインターネットで調べるだけでなく、見学やインタビューなどの体験活動を行うことで、知識を自分のものとして獲得することにつながる。
- ③ 児童の学習課題への動機付けが一番大切である。～何のために学習するのか
 - ・ 課題に出合って、「なぜだろう、知りたい」という学習意欲が、その後の主体的な活動へとつながっていく。「課題との出会い、課題を解決する、新たな課題との出会い・・・」この繰り返しが、稲作を学習することを通して、「人と人とのつながり」や「地域のよさ」、「営々と守り受け継がれてきた思い」「社会の移り変わり」「社会の問題」などに子どもながらに気付くだろう。そして自分で考えたことを伝えたい、発信したいという活動へつながると考える。
- ④ この探究学習では、生きる力の育成を目指しているので、学習活動の中で、児童にどんな力を身に付けさせたいのかを明確にすることが必要である。
- ⑤ 身に付けさせたい力を、どのような指導をしていけば高めることができるか指導方法を明確にしていく必要がある。
 - ・ 主体的に学習を進めるために、常に全体の見通しをもたせることが大切である。
- ⑥ 探究学習と言えど、授業時間は限りがあるので、指導者は、目標達成までの学習内容と学習活動に見通しをもつことが必要である。また、児童に学習意欲や多くの学びを得させるためにも、事前の下調べや準備も欠かせない。指導者自身も探究をすることとなる。
- ⑦ この総合的な学習の時間の単元「西門川稲作愛情物語」は、全35時間（5～10月）で計画している。新聞を作ったり、観察記録や意見文を書いたり等の書く活動が考えられるが、これらは国語の時間と関連させ指導していく。また、2年生は生活科の中で、内容を吟味し取り扱う。



(2) 具体的な実践

① 「課題との出会い～課題解決」の繰り返りで学習意欲を高める。

5/1 (月) オリエンテーション (どんな学習をするか説明)

5/8 (月) おにぎり対決 (ミルキークインたきたてと冷えたおにぎりどちらがおいしいか), 課題作り

課題 おべんとうにぴったり, 冷えてもおいしいミルキークインのひみつをさぐる。

5/10 (水) 米づくりを本やインターネットで調べる。

門川高校でのインタビューの準備をする。

5/12 (金) 門川高校の先生と生徒さんにインタビューする。バケツ稲に挑戦する。

5/15 (月) インタビューのまとめをする。

5/16 (火) 夜, 地域の方に学習応援隊の打ち合わせに来てもらう。

5/25 (木) 御田植え祭に参加する。

6/1 (木) 応援隊の方へ今までの学習を壁新聞にまとめ発表する準備をする。

6/2 (金) 応援隊の打ち合わせの話から, 課題作りをする。

課題 (2・4年) ○ 昔と今の道具を調べてみて未来の道具を考えてみんなに伝えよう。

(6年) ○ 昔と今の米を作る人の思いのちがいを調べ, みんなに伝えよう。



② 身近な教育資源を活用し, 学習の質と意欲を高める。

門川高校との連携 (農場でミルキークインを作り, お米甲子園など全国規模の大会で最優秀に輝く。)

- ・ 4月に2回事前打ち合わせに行く。その際, 学校の教育計画を話し, いろいろなアイデアもいただく。(バケツ稲に挑戦すれば, 稲の成長が身近に観察できますよ。苗は, 提供しますよ。)

地域との連携 (4つの地域の区長や高齢者クラブ会長に学習応援隊を依頼する。)


- ・ 昨年度3月に, ふれあい活動や米作りの行事評価をして, 次年度の計画を話し合う。このとき, 米作りについては総合的な学習の時間で取り組むことを話し, 協力を請う。
- ・ 学習応援隊発足式前の打ち合わせ会を5月中に開き, そこで米作りについて懇談会をした。その時の話し合いを文字化して事前に見せ, 新たな学習課題作りやインタビューに生かした。



③ 国語科との関連を図る

国語科の「話すこと・聞くこと」「書くこと」の領域と関連させながら、総合的な学習の時間の活動が、国語科の言語活動とつながるようにすることで、目的意識・相手意識が明確になり、学習意欲を高めることができる。

【総合的な学習の時間の内容と各学年の国語科の単元との関連】

総合の内容	2年生の国語	4年生の国語	5年生の国語	6年生の国語
インタビューをする、メモを取る	まよい犬をさがそう (大事なことを落とさずに聞く)	インタビューしてメモを取ろう(※3年教科書) メモのとりかたを工夫して聞こう		
バケツ稲の観察記録を書く	観察したことを書く			
調べたことをまとめる	じゅんじよく書こう たからものをしようかいしよう	みんなで新聞を作ろう わたしの考えたこと	資料を生かして考えたことを書こう 伝えよう、委員会活動(活動報告のリーフレット作り)	資料を生かして呼びかけよう 町の未来をえがこう 町の幸福論

5 成果と課題

(1) 成果

- ① 飛び複式学級を含む全校児童21名という小規模の学校で、児童に西門川小ならではの教育の質を向上させることは、学力の保障だけでなく、自分に自信をもつ、ふるさと門川を誇りに思うなど豊かな心の育成をするうえでも欠かせないことであった。その取組の中心として「西門川稲作愛情物語」を据え、全職員で試行錯誤しながら、地域、関係機関の大きな支援を得て一歩を踏み出すことができた。
- ② 小規模の特性である職員間で意思疎通が図りやすく、機動性のある活動が仕組めることを生かし、施設への見学や稲の観察などを多く入れることができ、学習がダイナミックになり、児童の意欲を高めることができた。また、全職員で一人一人の子どもに関わることで、子どもの成長を育み見届けることができた。

(2) 課題

- ① 各学年の「西門川稲作愛情物語」を通しての目標と内容をさらに吟味することで、目指したい生きる力は一層明確になると考える。例えばインタビューに必要なスキルを身に付けさせるには、あいづちを打って聞く、質問を重ねる、メモはキーワードを中心に短くなど具体化した指導も必要である。
- ② 最初は2～6年生全体で課題を解決していき、学習が進む中で学年に応じて、課題を立て、学習を進めていった。その時、2・4年と5・6年グループに分け指導体制も整えた。明確に目指す児童の姿や指導の見通しをもつことなど職員の指導力をさらに磨かなければならない。